

Title	日本語の時間表現 : 根源領域と目標領域の関係と不変化原理
Author(s)	伊藤, 創
Citation	大阪大学言語文化学. 2008, 17, p. 31-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77844
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語の時間表現

—根源領域と目標領域の関係と不変化原理—*

伊藤 創**

キーワード：時間表現、概念メタファー、不変化原理

Japanese has a lot of expressions about TIME. Many of them express temporal meaning by comparing TIME to SPACE or OBJECT.

The Conceptual Metaphor Theory (Lakoff and Johnson 1980) ascribes these linguistic expressions to our psychological process in which we construe TIME as SPACE or OBJECT. Thus, they are not just linguistic phenomena but realizations of our mind.

Being very abstract and difficult to recognize directly, the concept of TIME is often understood with the help of a more comprehensible one, such as SPACE or OBJECT. This process is called Mapping from Source Domain to Target Domain. In this Mapping, the structure of source domain is mapped onto Target Domain. For example, one of the structures of Source domain (SPACE) such as “front” or “back,” is preserved in Target Domain (TIME). As a realization of this psychological process, a lot of spatial expressions come to have temporal meanings.

It should be noted, however, that not all of the Source Domain structures are preserved in Target Domain. For instance, the structure “side” in SPACE is not preserved in TIME. It follows that there is a gap between the spatial expressions which have a temporal meaning and those which do not. The question that arises is which structure is preserved and which is not.

In order to provide an explanation for this gap, Lakoff (1993) adds a restriction on the Mapping process called the Invariance Principle: only those parts which are compatible with the inherent Target Domain structure will be preserved.

In this paper I examine Japanese temporal expressions focusing on the process in which spatial or other kinds of expressions have come to get a temporal meaning. I then divide the process into three parts. My proposition in this paper is that the gap can not be

* Japanese Temporal Expressions —Reconsideration of Invariance Principle and Analysis of the Relationship between Source Domain and Target Domain— (ITOH Hajime)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

explained by the Invariance Principle alone, because it is the principle that functions in the second part. The gap, however, is also generated in the first and third part. Assuming these two processes, we can capture the gap precisely. Through the analysis of the gap, I try to reconsider the relationship between Source Domain and Target Domain.

1 はじめに

日本語には、時間的意味を表す表現が数多く存在するが、その多くは、以下に示す様に、〈時間〉という概念を〈空間〉や〈モノ〉¹⁾として捉えたものである。以下の図1はその幾つかを示したものである。

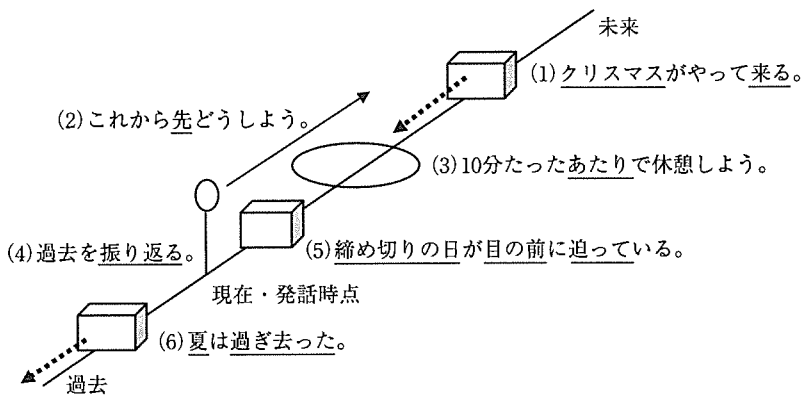


図1

「クリスマス」「締め切りの日」「夏」といった、ある〈時間〉、ある〈時刻〉は、(1) (5) のように、未来方向から「やって来る」「迫ってくる」〈モノ〉として、あるいは(6) のように、現在時あるいは発話時を「過ぎ去っていく」〈モノ〉として表現される。また主体の〈前方〉は〈未来〉にあたり、従って〈未来の時間〉は、(2) (5) の様に「先」「目の前」の〈空間〉として表現され、〈過去〉は(4) の様に「振り返る」方向にある〈空間〉として表現される。時間は、主体が位置し、移動していく地盤であり、従って〈10分後の時間〉は、(3) にあるように「10分たったあたり」と表現される。このような〈時間〉という概念を〈空間〉や〈モノ〉として描く表現は枚挙に暇が無い。

2 概念メタファー理論

Lakoff and Johnson (1980) 以降の概念メタファー理論によれば、上記の表現は、実際

¹⁾ ある概念、意味にあたるものには〈〉を、言語化されたものには「」を用いる。

に我々が〈時間〉という概念を、上記のように〈空間〉あるいは〈モノ〉²⁾として捉えているという、我々の認識のあり方が言語表現として具現化したものであるとされる。〈時間〉という直接的に認識する事の困難な抽象的な概念を、他のより経験的、具体的な概念によって捉えるのである。その結果、本来、形や大きさを持たない（あるいはその様な認識で捉える事の難しい）〈時間〉という概念が、〈モノ〉として捉えられ、〈時間〉は「使う」事や、「削る」事、「伸ばす」事ができる、あるいは〈空間〉として捉えられることによって、時間は「下ったり」「さかのぼったり」する事のできる、形ある存在として認識・表現されるのである。

概念メタファー理論においては、上記の〈時間〉という、喩えられる側の概念が属する概念領域を〈目標領域〉、〈モノ〉や〈空間〉といった喩える側の概念の属する概念領域を〈根源領域〉³⁾と呼ぶ。〈空間〉という概念で〈時間〉を捉えるという心的操作は、根源領域〈空間〉の構造が目標領域〈時間〉に写像される過程として捉えられる(Lakoff 1987)。以下は〈空間〉と〈時間〉の関係について図示したものである。



図 2

左の〈空間〉に属する〈前方〉〈後方〉といった概念要素が、右の〈時間〉に属する〈未来〉〈過去〉といった概念要素に、経験を介して対応づけられる。これが写像という心的操作である。経験を介した対応付けとは、例えば、我々が移動する際、我々の〈前方〉の空間は〈未来〉に辿り着く場所であり、〈後方〉の空間は〈過去〉に辿ってきた空間であるが、このような経験が、〈前方〉と〈未来〉、〈後方〉と〈過去〉という概念要素間に関係を見出し、お互いを結びつける事をいう。更に、概念要素間の対応付けがなされるために、〈前方〉という概念要素と結びついた言語表現「前」「先」が、〈未来〉を表すためにも用いられる事になる。このような〈空間〉という概念領域か

²⁾ 〈空間〉は〈モノ〉の下位分類とも捉えられるが、ここでは地盤や道のりとして捉えられている時間を〈空間〉としての時間、その地盤上に存在すると捉えられる事象を〈モノ〉としての時間とする。

³⁾ 以降、概念領域を〈〉で表す。〈〉は領域ではなく、個々の概念要素を表すものとする。例えば、〈空間〉には〈道〉や〈前〉〈後ろ〉〈上〉〈下〉などが属する。

らの写像により、《空間》の構造が《時間》に与えられるのである。

但し、《空間》に属する全ての要素が《時間》に写像されるわけではない。例えば、《空間》に属する〈左右〉という概念は、《時間》には写像されない。従って、〈左右〉に対応する言語表現「左右」は時間的意味では用いられないという、根源領域を表す言語表現と目標領域を表す言語表現の不均衡とも呼べる現象が生じることになる。

これについて Lakoff (1993) は、写像は目標領域の構造に矛盾しない形で行われるとする。これを不変性原理という。これは目標領域制約 (target domain override) とも呼ばれ、目標領域が根源領域からの写像を無条件に受け入れるわけではないというメタファー写像のメカニズム上の制約である。目標領域の概念は、根源領域の概念なしでは全く認識、理解できないものではなく、それ自体で独立して理解されうる。すなわち目標領域は根源領域に依らない構造 (内在的構造 inherent structure) を持っており、それらと矛盾しない限りにおいて写像が行われるのである。この原理については以下で更に述べるが、本稿では、この不変性原理だけでは、《空間》表現と《時間》表現の不均衡という現象に説明を与えるには十分ではないと考える。以下ではその理由を示し、さらにこれらに説明を与える為に、日本語の時間表現の生成過程を分析する。

3 不変性原理について

3.1 不変性原理

不変性原理が機能している事を示す一つの事例が、先述のような同じ《空間》に属する概念を表す語の中にも、《時間》に属する概念を表すことの出来るものとそうでないものが存在するという事実である。また以下の様に、

(7) a. 火曜日が近づく。

b. * 私達が火曜日に近づく。 (渡辺 2002)

(7) a が言えて、(7) b が言えないという事実も、この不変性原理が働いた結果であると考えられる。すなわち、《空間》においては、ある対象が我々に近づいてくる事もあれば、我々が対象に近づいていく事もあり、〈接近〉という概念に対して両方の経験のあり方が存在するが、《時間》においては、ある時刻が近づいてくるという経験のあり方は存在しても、意図的に我々がある時刻に近づいていくという形で認識される経験はほぼ無いといってよい。従って、(7) a.b 間に見られるような不均衡は、(7) b の言語表現で表される経験のあり方が、《時間》という概念領域の構造にそぐわないという不変性原理が機能したものと考えられる⁴⁾。

⁴⁾ 但し、我々が能動的にある時刻、時間に向かっていくと捉えうる経験に関しては、「学生たちは清らかな気持ちで卒業式を迎える」「彼は有意義に夏休みを過ごした」等のようにヒトを動作主とする事も出来

また Iwata (1995) では、同原理に関して、《空間》では二次元、三次元で用いられる「around」「expand」といった表現が、《時間》においては一次元での理解・使用に収束する事を述べる。例えば、(8) に示す様に《空間》で用いられた「around」は<木の周りの空間>、即ち二次元の空間を表す。同様に(9)の「expand」は三次元の空間を表す。

(8) We are sitting around a tree. (Iwata (1995 : 183))

(9) Metals expand when they are heated. (OALD Iwata (1995 : 175) より引用)
しかし、以下のように各表現が《時間》で使用された場合には、各表現は<未来>と<過去>を結ぶ一次元の時間軸上での範囲を表す。

(10) Hats of this kind were worn in Paris around 1880. (Iwata (1995 : 178))

(11) expand payments to five months. (OALD Iwata (1995 : 178) より引用)
<時間>は、一次元という内在的構造を持ち、《空間》の表現が表す二次元的、三次元的構造は、その一次元という《時間》の内在的構造に縮約還元された形でのみ転移保存されるのである。

3. 2 不変性原理の解釈

ここで不変性原理の解釈について考えたい。以下に不変性原理について引用する。

“The Invariance Principle”:

Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with the inherent structure of the target domain. (Lakoff (1993:215))

これまでに述べてきた、写像の制限というものは即ち、根源領域の概念が、目標領域の内在的構造に合致する形でのみ、転移・保存されるという事である。先の例で言えば、「around」が二次元的・三次元的な意味特徴を持っており、一次元として理解される《時間》という概念領域の構造に合わない、従って、「around」の時間的意味での使用はない、という経過を辿るのではなく、《時間》の構造に即した形で理解され (つまり、二次元、三次元から一次元へと限定され)、その使用がなされるのである。

このように考えると、不変性原理は、《時間》での「around」の使用そのものをブロックするフィルターではなく、その意味・あるいは使用法を《時間》に合うように濾過するフィルターの役割を果たすとってよいかと考える。

る。ヒトと時間のいずれを動作主として捉えるかは相対的な基準であり、これについては Talmy (2000) 参照。ここで重要なのは、普段、我々は時間の経過という経験を、時間を動作主として捉えており、その認識が言語表現上の制約として現れるという事実である。

ここで以下のような表現について考えたい。

(12) 10分たったあたり(ところ／*周辺／*周り)で休憩を入れた。

上記の文において、二次元的、即ち、<前後>に加え<左右><斜め>などを含意する表現である「あたり」「ところ」が時間的意味を表しうるのは、「around」と同様、**不変性原理**によって、これらの意味特徴が次元という形に収束されているからであるといえる。では何故同じように二次元空間を表す「周辺」「周り」が言えないのであろうか。これらの表現も、上記の原理によって次元の概念として<時間>領域で使用される、という事がなぜ起こらないのであろうか。

3. 3 不変性原理の適用範囲

不変性原理に関して、もう一つ疑問を提示したい。以下をご覧ください。

(13) a 担当の者と相談した上で、改めてご返事させていただきます。

b.* 改めてご返事させていただく下で担当の者と相談いたします。(砂川 2000)

(14) 雨が降らないうちに洗濯物を入れてしまおう。

(13) a においては、「上」という語が、時間的意味で用いられている⁵⁾。ということは、目標領域である<時間>の中に<上下>という構造が存在するはずである。にもかかわらず、(13) b が示す様に、「下」は時間的意味を表す事ができない。(14) の「うち」に対する「そと」の関係も同様である。

不変性原理は、目標領域の持つ構造に合致しない構造は写像されない、というものであったが、ではこの様に、目標領域<時間>に<上下><内外>という構造が存在する事を示す言語表現「上」や「内」の、<時間>領域での使用が認められるにも関わらず、なぜ「下」や「外」は同領域での使用がなされないのであろうか。

「あたり」「ところ」に対する「周辺」「周り」、あるいは「上」「内」に対する「下」「外」などの関係を考えると、ある言語表現が<時間>に属する概念を表す表現として用いられない、という事実に対して、**不変性原理**による、というだけの説明では十分ではないように思われる。こうした<空間>領域を表す言語表現と<時間>領域を表す言語表現の間の不均衡という現象は、不変性原理だけでは十分に説明が与えられない事から、本稿では、<時間>を表す表現がどのように生まれ、また増加するのかという観点からもう一度、この不均衡を捉え直す事を試みる。

⁵⁾ 「上で」には、作業などを積み重ねていく、という意味が含まれており純粋に時間的意味のみを表すものではない。これについては砂川 (2000) 伊藤 (2007) 参照。

4 《時間》表現の増加との不変性原理の適用

4.1 《時間》表現の増加

本稿では、時間表現が生み出され、増加する過程を三段階に分けたいと考える。

第一段階は、C.Johnson (1987) の提示する合併と分化という過程に相当する。C.Johnson (1987) は、子どもの発達段階において、本来は二つの独立した経験であるものが、一つの経験として認識される段階があるとする。例えば、〈見る〉と〈知る〉という経験であれば、〈見る〉ことによって〈知る〉という経験が非常に多く、ある発達段階にある子どもはその両者の概念の区別を行わないという。但しその段階においても、「I see what you mean.」という「see」が〈分かる〉という意味でのみ用いられている発話において、子どもは「see」の意味をきちんと理解しているという。子どもが「see」を〈知る〉という意味で理解しているかについてはより詳細な研究が必要であると思われるが、ここで重要なのは、このような身体的な〈見る〉という経験が、認識的な〈知る〉という経験と同時に経験される段階が存在し、こうした経験によって、メタファー写像が動機付けられているであろう事である。この様に、〈見る〉と〈知る〉の様に二つの概念が、区別されずに一つの「see」という語に結び付いている状態を、合併という。そしてこの未分化であった、身体的経験〈見る〉と、認識的经验〈知る〉が、独立した二つの経験として認識されるようになる事を分化という。これらは子どもの言語獲得の過程について述べたものであるが、このような認識過程は、《空間》に属する表現が、《時間》に属する概念を表すようになるという過程にも当てはまると思われる。すなわち《空間》と《時間》の関係において以下のような段階が想定できると考えられるのである。

1. 原初的な段階においては、ある経験Aは《空間》《時間》の両方に属するものとして、認識される。

2. 経験Aが、《空間》と《時間》という別個の枠組みにおいてに理解される。

国広 (1977)、碓井 (2002) (2003) などは、以下のような、《空間》《時間》いずれにも属するような表現が、《空間》・《時間》の多義性を持つきっかけになるとしているが、これらも上記の二つの過程から捉える事ができるであろう。

(15) 彼は先にいった。

(16) 彼は後からやってくる。

表現が、物理的经验と認識的经验に分化するという第一段階に続くものとして、本稿では、第二段階として連鎖的伝播という段階を仮定する。これは田中・深谷 (1996) の提示するもので、表現が、個人内的に、そして個人間的に伝播するというプロセスをいう。例えば、「理論を作る」という表現の仕方を学ぶと、その「作る」から、「組み立て

る」「構成する」などの類義表現を連鎖的に作り、試していくのである。つまり、この段階で『理論は建物である』という認識の枠組みの存在は仮定しない。但し、これらの散在する表現群の中から、この『理論は建物である』というメタファーをよみとれば、それは潜在的でなく表現されたメタファーとなり、これが<理論>を語る枠組みとなり、新たな表現を生み出す手段となる⁶⁾。

これを時間表現に当てはめてみれば、例えば、「前」という<空間>の表現が<時間>で使えるなら、「先」も使えるだろう、逆の「後」も使えるだろう、「後」が使えるなら「後ろ」も、といった具合に、類義・対義関係を通じて<時間>を表す表現が増加していくという過程を想定する事ができる。この連鎖的伝播を第二段階とする。

これまで述べてきたプロセスは、<時間>が認識上で構築され、それを表す言語表現が増加するというものであったが、本稿では更に、第三段階として類義表現の競合という段階を想定する。ある概念に複数の表現が結びついた場合には、それらの表現間に何らかの意味的な差異が生じ棲み分けをなす、或は、類義語の幾つかは獲得した意味を失うことが考えられる。すなわち、これまでの過程で時間的意味を獲得した様々な表現が時間的意味を失う事になるのである。またこの<時間>表現の減少という過程を想定する事によって、時間表現の通時的な変化を捉える事もできるのであるが、この第三段階については後に詳しく述べる事にし、ここまでの過程を以下にまとめる。

第一段階 1. <空間>と<時間>が一つの表現に合併

2. 1の<空間>と<時間>が分化

第二段階 3. 分化し、<時間>を表す様になった個々の表現から連鎖的伝播

4. 連鎖的伝播によって増加した個々の表現間に網掛け

5. 網掛けによって抽出されたメタファーに従って時間表現が増加

第三段階 6. 類義表現間の競合

本稿では、不変性原理によって説明されてきた<空間>と<時間>を表す言語表現間の不均衡は、目標領域の構造が写像を制限するという不変性原理に加え、上記、第一段階の1. の合併の生じやすさ、と第三段階6. の類義表現間の競合にも起因するもので

⁶⁾ 深谷・田中(1996)は、「作る」から「組み立てる」「構築する」等が<理論>を語る際に使用される様になる過程について述べているが、そもそも<理論を作る>という概念が、なぜ「作る」という表現と結びつくのかという、<理論>を語る表現が豊かになる前の段階については言及していない。この最初の対応関係が作られる際に、<理論を作る>という概念が、何らかの概念上の対応があるからこそ物理的<作る>と結びついている事は否定しないが、この段階では、『理論は建物である』のような形で捉えられているのではなく、より抽象的な形で物理的<作る>と抽象的<作る>が結びついていると考えられる。従って「作る」という表現は<建物>に限定されず、「こねる」「練る」「積む」「固める」といった方向にも拡張する。ここで重要なのは、概念上の結び付きによって<理論>を語る表現が生じると過程(<理論を作る>と「理論を作る」が結びつく過程)とは別に、表現の生成過程が存在するという事である。

あると考える。以下、この二つについて述べる。

4. 2 合併の生じやすさ

以下の(17)(18)の表現が表す様な状況は、《空間》に属する概念が、《時間》概念としても同時に経験され、二つの概念が合併している可能性がある。

(17) 僕が寝ている横で、彼女は勉強している。

(18) 彼女に続いて、彼が部屋に入ってきた。

(17)に関しては、「横」という言語表現の表す隣接している>という《空間》に属する関係性が、<同時>という《時間》における関係としても認識されうる。「平行して」「隣」「脇」「かたわら」「そば」といった表現が現す概念にも同様にこうした両概念が合併している事が考えられる。或は(18)であれば、「後から」「後ろから」「次に」等、移動において<後続する>事は時間的に<以後>であるという読み込みから、《時間》に属する経験としても認識されうる。この様な経験に対応する表現は、《空間》と《時間》が分化すれば、《時間》だけを表す表現としても使用される事が考えられる。

しかしながら、同じ《空間》に属する<斜め前><底><面><角><隅>などの概念は、《時間》における関係性として認識される経験が多くはないと思われる。これは我々が通常、移動(視線などの仮想的な移動も含む)・変化をもって<時間の経過>を認識することが多いからであると考えられる。従って、移動に伴う空間的位置関係(特に前後方向への直線的移動)が、最も《時間》における経験としても認識されやすい。また<同時>という時間の認識には、空間的な近接関係が最も時間的意味を喚起しやすいものと思われる(=合併が生じやすい)。逆に言えばこれら以外の空間概念においては、《空間》《時間》の概念が合併している可能性は低いと考えられる。

この事に鑑みれば、時間表現の増加の過程の第一段階1において、同じ《空間》に属する概念であっても、それらが《時間》に属する経験としても認識されるかについては差が見られる事になる。これが合併の生じやすさに差があるという事であり⁷⁾、《空間》と《時間》に属する表現間の不均衡を生み出す一つの要因であると思われる。

《空間》《時間》の二つの概念が合併している場合、当然その二つは、単一の表現に結びついている事になるが、こうした表現は、常に《空間》と《時間》の両方の概念を喚起する事になる。従って、これらの表現においては、《時間》に属する概念のみを独立させるという分化という過程に伴い、《時間》だけを表すようになるという可能性も高い。したがって《空間》《時間》の多義を持つことになるのである。しかし合併の可

⁷⁾ 合併とは、別個の概念が一つになる、という意味ではない事に留意されたい。本稿で「合併が生じやすい」という場合、ある状況が、空間と時間の両概念を同時に喚起させる可能性が高い、事を意味する。

能性の低い空間概念、及びその表現にはそのような過程が生じることは考えにくい。この差が、これまで不変性原理として一くりに捉えられてきた現象の一側面であると考ええる。ここで捉えておかなければならない事は、この段階では、不変性原理のいう目標領域<時間>の構造などが影響しているわけではない事である。

本稿では更にもう一つ、<空間>と<時間>に属する表現間の不均衡について、第三段階の類義表現間の競合という要因を考えるが、これについての述べる前に、その前の第二段階についても少し説明を加えたい。

4. 3 不変性原理の機能しない段階

<時間>表現増加の第二段階として、3.分化した時間概念を表す表現の個々から連鎖的伝播を通じて表現が増加し、4.それらの表現間に網掛けが行われ、5.その網掛けによって抽出されたメタファーに従って時間表現が増加する、という過程を提示したが、この3.の段階は注目に値する。

この段階では、「先」「前」「後」といった<時間>の概念を表すようになった言語表現から、「奥」「彼方」「向こう」「後ろ」等が、同義関係等による連鎖的伝播によって時間的意味での使用が可能になる。この連鎖的伝播という過程の存在を示すものとして、「後ろ」「彼方」「奥」など、現在では時間的意味では使用されない表現にも、以下に示す様に、通時的には時間的意味が存在した事実が挙げられる。

「後ろ」9. (行った者、死んだ者の立場から見ていう) 人が立ち去った後。また死後。

世をさりなんうしろの事知るべきことにはあらねど 源氏 (1001 - 14 頃)

「彼方」1. 他称。話し手、相手両者から離れた方向を指す。

また現在を起点として過去・未来の時間を指す。

今より以往 (かなた) は永に復作らずして…地蔵十輪経元慶七年点 (883)

「奥」1. 時間的に、現在から遠い先のこと。過去の意には用いない。将来。行く末。

わが背子如何に奥もあらめ 万葉 (8c) (日本国語大辞典第二版)

目標領域の構造に合わない写像を抑制するという不変性原理によっては、このように、一旦は<時間>を表す表現として使用され、その後、その意味での使用が消失してしまった表現が存在する、という事実は捉えられない。なぜなら、そのように不変性原理が働くのであれば、「後ろ」「奥」といった表現が、<時間>の持つ構造に合わず、そもそも写像自体がなされない、という結果になるはずだからである。<時間>表現の増加においては、この様に不変性原理が機能しない段階が存在するのである。

4. 4 類義表現間の競合

第三段階 6. の類義表現間の競合とは、上記のような過程において、増加した《時間》を表す言語表現の間で、使用頻度の高低という差が生じ、前者のみが《時間》表現として残っていくという過程である。これが《空間》《時間》における表現間の不均衡を生み出すもう一つの要因である。この使用頻度の差は、《時間》表現として使用される前の概念領域での意味、使用法などに起因すると考えられる。

例えば、先に「見る」と「知る」の関係、すなわち<見る>という概念と<知る>という概念が、見る事によって知る、という経験を通じて合併・分化した事をみたが、同様に、聞く事によって知る、という経験もかなり日常的に起こる経験であろう事を考えると、<聞く>と<知る>という概念の間にも同様の関係が成り立つはずである。

(19) メールで彼に予定聞いておいて。

このような表現においては、電子メールは<見る>ものであるにもかかわらず、「聞く」という表現が使用されている。ここでは「聞く」という表現が<情報を得る>すなわち<知る>という意味で使用されている。しかしながら、「見る」「聞く」が常に<知る>という意味で使用できるわけではない。(19)は言えても、(20)(21)のような文は明らかに不自然である。

(20) *天気予報をちゃんと新聞で聞いておくよ。

(21) *彼に電話で予定を見ておくよ。

このように、元々の物理的《知覚》での意味、使用法が《認識》における使用にも制限を設けるのである(この場合、制限は両語の棲み分けという形で具現化している)。

こうした目標領域での使用において影響を及ぼす根源領域での意味・使用法を伊藤(2007)では痕跡と呼ぶ⁸⁾。

例えば、《時間》を《空間》をもって捉えた場合の、主体の<後方>にある時間(=<過去>)を表す「ウシロ」と「アト」という二つの表現を考える。森田(1989)国広(1997)では、《空間》において前者がより静的な位置関係を表し、後者が動的な位置関係を表す事を述べるが、こうした意味特徴は痕跡として《時間》での使用においても影響を及ぼす事が考えられる。

空間的位置関係を表す「ウシロ」が静的で、「アト」が動的であるという事実は、以下のような表現において「アト」が使えないことから窺う事が出来る。

(22) 箱の{ウシロ / *アト}にボールがある。

⁸⁾ 痕跡による影響は、合併・分化という過程を考えた場合、論理的な帰結として導き出せる。一方の領域で用いられていた表現から別領域の意味が分化する訳であるから、その意味・使用法は本来の意味領域に依存したものとなるのは当然である。《空間》の痕跡とは、分化が進み、時間的意味を独立させた後に、他の時間表現との意味的棲み分けにおける弁別素性としての機能を果たすものをいう。

また「アトずさり」「町をアトにする」といった「アト」を用いた表現は、移動を含意した表現が殆どである。

また《空間》における「ウシロ」には、隣接性という意味特徴も存在する。

(23) 太郎は僕のウシロにいるよ。

(23) において「ウシロ」は太郎と僕の位置が相当近く、すなわち隣接していないと使えない。この「ウシロ」のもつ隣接性という意味特徴によって、デフォルトで「ウシロ」が使用された場合には、この隣接性がそのプロトタイプの意味として、聞き手には喚起される⁹⁾。

「ウシロ」が持つ静的という痕跡は、動的な《時間》の構造に合致しにくいものであり、また隣接性という痕跡は、《時間》において隣接性を持たない「アト」に比べ意味的な限定がより厳しい事を意味する。即ち《時間》での使用が限られるのである。

こうした「ウシロ」の持つ痕跡により、《時間》においては、動的で、隣接性という痕跡を持たない「アト」が「ウシロ」との競合において上回ることになる。「ウシロ」の《時間》での使用が消失してしまった原因はこの様な痕跡によるものと思われる（先にも述べたが「ウシロ」は通時的には時間的意味で使用されている）。

こうした過程が、本稿で類義表現間の競合と呼ぶものであり、《空間》《時間》表現間の不均衡を生み出す要因の一つであると考えられる。この過程は、不変性原理のいう、《空間》から《時間》への写像への制限というのではなく、一旦時間的意味を獲得した表現に、言うなれば、ふるいをかける、という過程である。

5 結語

以上、本稿ではこれまで不変性原理で説明されてきた《空間》表現と《時間》表現の間に見られる不均衡を、後者の表現が生み出され、また増加していく過程を分析することにより、より精緻に分析する事を試みた。《空間》表現と《時間》表現の不均衡という現象は、不変性原理による《空間》と《時間》という二つの概念間の写像の制限に加え、そもそも様々な表現が時間的意味を喚起しうるか否かという、〈時間〉が〈空間〉や〈モノ〉として概念化される以前の段階で働く合併の生じやすさ、及び、一度、時間的意味を持つに至った表現が、またその意味を消失するという類義表現間の競合という、少なくとも三つの要因を考慮しなければ捉える事はできないと考える。

⁹⁾ この隣接性は変更可能であり、「ずっと」などの修飾を加えることが出来る。その場合、この隣接性は別の形で実現されている事が必要である。すなわち、隣接性は「距離の近さ」という形で実現されず、かわりに対象となる人物と発話者が、ある列にならんでいたりと、一本の同じ道の上にいたりする状況が必要となる。

主要参考文献

- Iwata, Seiji (1995) "Invariance again: what is preserved in a metaphorical mapping?"
English Linguistics Vol. 12, The English Linguistic Society of Japan.
- Johnson, Christopher (1997) "Learnability in the Acquisition of Multiple Senses: SOURCE Reconsidered," *Proceedings of the Twenty-Second Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society*, 469-480.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind*, University Chicago Press, Chicago and London. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1992)『認知意味論』 紀伊國屋書店)
- Lakoff, George (1993) "the contemporary Theory of Metaphor," *Metaphor and Thought* In Ortony, Andrew (ed). 202-251 Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Talmy, Leonard (2000) "Concept Structuring Systems," *Toward a Cognitive Semantics*. Vol.1, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 伊藤創 (2007) 「空間から時間へ」 修士学位論文 大阪大学大学院言語文化研究科
- 碓井智子 (2002) 「空間認知表現と時間認知表現：日本語「サキ」の認知言語学的考察」
『日本認知言語学会論文集』, Vol.2 150 - 159 日本認知言語学会
- 碓井智子 (2003) 「空間から時間へ～「アト」(跡・後)の認知的観点からの考察～」
『日本認知言語学会論文集』, Vol.3 66 - 73 日本認知言語学会
- 国広哲弥 (1997)『理想の国語辞典』大修館書店
- 砂川由里子 (2000) 「空間から時間のメタファー」『空間表現と文法』くろしお出版
- 森田良行 (1998)『基礎日本語辞典』角川書店
- 渡辺伸治 (2003) 「「前」の用法－統一的説明試論」『言語における時空をめぐる 言語文化共同研究プロジェクト』大阪大学言語文化部：大阪大学大学院言語文化研究科

辞書

- OALD = Oxford Advanced learner's Dictionary, 4th ed., Oxford University Press, Oxford, 1989
- 日本国語大辞典 第二版 小学館 2000.12-2002.12